坂田郡志卷下 終

坂田郡誌の後に題す

予が中川君と相識るに至りしは、坂田郡志編纂事業の起りたる當初にあり、而も其時に於ては文信相通するのみにて、未た氏の如何なる人物なるやも窺ひ得ざりき、其後史料蒐集の事進捗するに及んで、氏が熱心と眞贄とは、必す此大事を完成すべき人なるを知り、郡よりの囑を諾して、初校の勞を執るに至れり、爾來數年氏が新史料發見は、殆んど在來の所傳を半壞し盡し、改作又改作、予が呈案の如き早く既に陳腐の說と成り了せり、研究の効可畏可尊と云はんかな、さはいへかゝる新史料を今日に保存し來りたる坂田郡は實に多幸なるかな、同郡が幾多の費用を靡し、中川氏等も亦幾許の私財を捐てゝ此大册を成す、寔に其甲斐ありと云ふ可し、予が校者としての位置前述の如し、幸に本書が世の注意を引く事あらんには、其功や中川氏其他編纂委員諸氏が占

有すべきもの、予は唯文飾の責に任するに過ぎざるなり、本書成るに及んで中川氏より予に跋を需めらる、予辭する能はず、乃ち其由を記して以て後書に替ゆと云ふ、

伊吹山下清瀧寺の書院にて

大正二年六月

堀田璋左右識す

坂田郡志編纂顚末

本志は前々郡長友田效三氏の創意に出て前郡長澤信次郎氏之を完成し予は其の成を受けて剞劂に附し今や世に公にするに至れり其の經過の概要を叙列すれは左の如し

明治三十五年本郡教育會の事業として本郡志編纂の擧を決し先つ之か資料として會長友田效三氏は郡内各小學校長に依囑し其の町村誌を編纂せしめ翌三十六年各町村誌完成せり依て會長は左の諸氏に郡志編纂委員を囑託せり

伊夫伎資弼　江龍清城
北村勝多　伊夫伎治郎一
瀧澤半之平　平川喜代太郎
清水精一郎　杉本吉士

同時に委員會を開き常務委員を杉本吉士氏に囑託し將に編纂に着手せんとするに際し偶日露の戰役起り中止するの止むを得さるに至れり次て明治四十年二月友田郡長は再ひ郡志編纂の擧を起して今回は郡の事業として既成町村誌に基き編纂せん事を提案し郡會の協賛を經たり同年四月先の常務委員杉本吉士氏辭任せるを以て中川泉三氏に常務委員を囑託し同年七月委員會を開き編纂の方法を左の如く決したり

各町村誌を更に委員に於て分擔して再調査をなし常務委員は之に基き本年度内に編纂を結了することゝし委員の分擔を定むる左の如し

柏原、春照、伊吹ノ三ヶ村　中川泉三

大原、法性寺、神田ノ三ヶ村　瀧澤半之平

東黑田、西黑田、日撫ノ三ヶ村　清水精一郎

醍井、息長、息郷ノ三ヶ村　江龍清城

鳥居本、入江ノ二ヶ村　平川喜代太郎

六莊、長濱ノ二ヶ町村　北村勝多

南郷里、北郷里、神照ノ三ヶ村　伊夫伎治郎一

委員江龍清城氏辭任せるを以て更に北村壽四郎氏に委員を囑託せり各委員は分擔したる町村誌の再調査に從事し增補改訂する所尠からす

同年十二月より編纂に着手し四十一年二月に至り編纂半ば進行したる時に當り郡長の更迭となり新に澤信次郎氏來任し郡會亦改選となり本志編纂の方針一變せり即ち各町村に於て調査したる編纂資料は未だ十分ならざるを以て更に委員をして根本的に材料の蒐集に努めしめ然して後編纂せんことに決し

郡會は多額の經費を決議せり當時の郡會議員諸氏の氏名を左に存錄す

柏原村	小路政太郎	春照村	林　繁太郎		
伊吹村	松井孝治郎	大原村	三浦寅三郎		
東黑田村	井關泰藏	醒井村	江龍清城		
息郷村	山本甚之助	鳥居本村	高橋邦太郎		
入江村	久米　久右衛門	法性寺村	日比龜次郎		
神田村	坂　松太郎	息長村	杉本　專右衛門		
日撫村	安食太郎平	西黑田村	清水精一郎		
六莊村	小林　喜代治郎	南郷里村	筧　駒太郎		
北郷里村	宮宅伊之吉	神照村	澤村長治郎		
神照村	槌田善七	長濱町	吉田作平		
長濱町	大浦貞治郎				

四十一年四月中川委員は史料調査の爲帝國京都大學に出張し更に瀧澤委員と共に奈良東大寺の文庫及ひ石崎文庫の圖書を借覽すること數日歸途本縣師範學校に至り藏書を調査せり

同年九月中川委員は京都府立圖書館に至り圖書を借覽し其の他郡内の社寺舊家を歷訪して史料の蒐集に努めたり

四十二年の郡會は大に見る所あり巨額の調査費を決議す蓋し帝國東京大學史料編纂係の藏書は全國の史料を博く蒐集せるを以て委員を派遣し之を調査せしめんか爲なり同年四月中川委員は在京數十日奈良朝平安朝時代の古文書等獲る所頗る多し

此月文學博士久米邦武氏の西下を機とし本郡教育會の總集會を開き博士の講演を請ひ併せて郡志編纂に就き指導を仰きたり

同年九月中川委員は帝國東京大學及ひ遊就館に就き史料を借覽し又帝室東京博物館歴史部を訪ひ本郡出つる所の古瓦古陶器其の他の發掘物の時代研究を請ひたり

四十三年四月中川委員は三たび帝國東京大學に史料を探ること數十日更に水戸市に至り彰考館の文書を借覽し獲る所尠からす

同月文學士堀田璋左右氏の來郡を請ひ委員同行郡内の史料を調査せり又山内侯爵家小笠原子爵家等に本郡に關係ある古文書の謄寫寄贈を請ひたるに山内侯爵家の如きは喜て藏書を索捜し續々發見の史料を寄せられ小笠原子爵家亦南北朝時代に於ける有力なる史料を贈られたり

同年八月帝室東京博物館より高橋健自氏の出張を請ひ古代の遺物古墳發掘物等の調査指導を受けたり又十二月には文學博

士喜田貞吉氏の來郡あり醍井山上の古蹟列石を踏査せられたり

四十四年三月には中川委員醍醐三寶院に就き平安朝時代の史料を得同年九月には京都府立圖書館并に粟田口青蓮院を訪ひ比叡山と本郡との關係古文書を得又京都三井男爵邸に就き同家史編纂所に於て戰國時代の史料を得しこと尠からす

其の他各委員は縣下各地に奔走し終始史料の探求に努め材料の蒐集全く了りたり上卷載錄する所の古文書六百餘通を得たるは編纂委員が最も苦心の存する所なり編纂は四十三年八月より着手し大正二年三月全部脱稿し茲に東京中村工場に其の印刷を托するに至れり

以上叙ふるか如く本志は始め友田效三氏其の種子を播下して生苗を育成し澤信次郎氏移して之を本田に植ゑ委員中川泉三

外數氏と共に久米堀田等碩學の指導を得て犁鋤耕耘に努め郡會は裕に之か肥料を給して其の發育を盛ならしめ玆に豐饒なる秋收を見るに至れるなり予は唯其の秋收を受けて調製俵裝を了したるに過きさるを以て序文の請を辭して諸氏か本誌完成に對する苦辛經營の跡を叙し其の勞を多謝すると同時に懇篤なる指導を與へられたる久米文學博士堀田文學士及ひ多大の資料を供せられたる左記

帝國東京大學史料編纂係
帝國京都大學
帝室東京博物館
奈良東大寺佛教圖書館
粟田口靑蓮院
醍醐三寶院
水戸彰考館
山内侯爵家
小笠原子爵家
京極子爵家
三井男爵家

等并に縣下藏書家の高義を深謝すと云爾

大正二年四月　　滋賀縣坂田郡長　鵜飼元吉

卷尾の辭

歴史と地理は離る可からず、本郡の地理が、交通の要路に當るを以て、上古以來、交通上、軍事上、其他社寺名族の居住等、史蹟を存すること多きは、本志既に之を記述せり、獨り本郡而已ならず、由來近江の地は各郡共に、滿目の山川皆史蹟と稱すべきも、古への風土紀は亡びて傳はらず、其他近江の歴史地理を正傳せし史書存せず、近き德川氏の中世に、二三の地誌は編纂せられしも、各藩分封の時代には、各々文書記錄を政略に秘して、互に公開を許さず、爲に完全の地誌と謂ふべきものなし、膳所藩士寒川辰清翁が、當時の名儒新井白石先生を顧問と仰ぎ、編纂せられし近江輿地誌略は、近江地誌中の粹と呼ばるゝも、甲地は密に乙地は疎に、丙村は繁に丁村は簡なるを免かれざるは、封建分封の弊を示せるものに

して、太だ遺憾とすべし、本郡が本志を編纂せし所以實に此に存す、不肖等、明治四十年四月、時の郡長友田效三氏より、本志編纂委員を囑託せられ、（委員江龍清城氏は同年七月に辭退し、八月二十日、北村壽四郎氏委員を囑託せらる、）爾來編纂上大綱の變化と經過、并に久米博士、堀田學士、其他諸大家の指導を蒙りしは、歷代郡長の序跋と、編纂常務委員の緒言とに概記せしが如し、不肖等は、各自本業の餘力を割き、以て史蹟の調査、史料の採訪等を分擔し、發見の新料は之を常務委員の許に送り、常務委員は之を他の史料と共に其時代に配列し、一致協力獲る所の文書七百通に垂んとす、而してこれ等多數の史料は、諸史に散見する史料と併せて中卷時代史、并に下卷諸篇の考證に供し、以て從來埋れし、本郡を中心とする地方歷史の事實を窺知するを得たり、之れ全く諸家の好意に依ると雖も、正しく　皇德昭々たる聖代の恩澤に外ならず、之を彼の封建時代の地誌の編者が、苦

辛慘憺、史料調査に奔走するも、兵略と政策の爲に、深く秘して、開放せられざりし古に考へて、其差の霄壤も啻ならざるを喜び、愈々　皇恩の洪大なるに感泣せり、されば言を換れば本志も亦聖代の賜物と謂ふべし、然れども本志收むる以外、猶貴重の史料が、諸家の匣底に埋れて出でざるもの、又既に世に公にされたるも、委員等涉獵の足らざるにより、本志に漏れしもの、少からざるを信ずと雖も、編纂に期限あり、委員は餘力の業にして、常務委員も猶專務に非ず、故に細査精考完璧を期する餘裕なく、未だ以て不肖等　本意の如く、責任を全くするを得ざるを遺憾とするも、茲に一段落を畫するこゝ爲せり、後來の學者が、本郡の爲に精細なる調査と、嚴峻なる改訂を加へらるゝを待て、而して始めて完璧を期すべきなり、今本志の刻さるゝに當り一言を序し、卷尾の辭とす、

附記

明治四十年、本志編纂を再興せられしより、郡長の交替三氏に亘りしも、代々の郡長、熱心に斯業を管督せられ、又郡の一課長にして編纂委員たりし、多羅尾徹、伊藤繁太郎、山岡弘之の三氏、本郡視學にして編纂委員を兼たる、細井良吉、角田龜次郎、川崎泰英、大橋岩治郎の四君等が、盡瘁せられし功勞と、明治三十五六年の間、郡内各小學校長諸氏が、其町村誌編纂に從事せられし功蹟を併せ謝す、

又不肖等と共に、編纂委員たりし、伊夫伎資弼氏は明治四十四年二月白玉樓中に入り北村勝多氏は大正元年十一月泉下の人となり、共に本志の成るを見られざるを憾む、生前を追懷して轉た悄然たり、幽明を隔つと雖も玆に其功勞を表す、

大正元年十二月

近江坂田郡志編纂委員

平川喜代太郎
瀧澤半之平
伊夫伎治郎一
清水精一郎
北村壽四郎
中川泉三

編纂委員

前列右ヨリ　江龍清城　北村壽四郎　中川泉三　平川喜代太郎

後列右ヨリ　清水精一郎　瀧澤半之平　伊夫伎治郎一

杉本吉之輔

伊夫伎資弼

多羅尾徹

前田喜三郎

北村勝多

細井良吉

伊藤繁太郎

大正二年八月二十日印刷
大正二年八月廿三日發行
（非賣品）
滋賀縣坂田郡役所
東京市下谷區下根岸町十番地
印刷者　津田勝次郎
東京市下谷區下根岸町十番地
印刷所　はい原中村工場

959
26

終